

---

# 二人の霊能者

神村律子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の霊能者

### 【Nコード】

N1120I

### 【作者名】

神村律子

### 【あらすじ】

霊能者西園寺蘭子と箕輪まどか。二人は出会おうべくして出会った。何が起ころうとしているのか？

私の名前は神村律子。

じゃなかった、箕輪まどか。

何であんな中年オババと言い間違えたんだろ？

まだ小学校六年生の美少女なのに。

この前、ハリセン　ンの死神に似てる奴だろ、と言った他校の男子をフルボッコにした。

話し方が大人び過ぎていて、とても小学生には見えないという誉められてるんだか、貶されてるんだかわからない事を言われた事もある。

そんな私は、あまり大きな声では言えない能力がある。

霊能力だ。

誰、今「零能力<sup>ゼロ</sup>」って言ったの？

後で酷いわよ。覚えてなさいよ。

で、話を戻すけど、私は霊感が強い。

県警の鑑識課にいるお兄ちゃんの依頼で、時々霊視もしている。

将来は県警本部長を目指している訳ではないが、警察に恩を売っておけば、いざという時何か良い事があるだろう。

そんな優れた能力の持ち主である私だから、普段から浮遊霊が近づいて来てウザい事この上ない。

追い払うのに一苦労なのだ。

昨日もたくさんさんの浮遊霊に寄り付かれ、ようやく逃げ切った。

最近までお付き合いをしていた牧野君とは、そのせいで別れてしまった。

男の子のビビりはカッコ悪い。

もう興味なし。消えて下さって感じ。

「また今日もウザいんだろうな」

学校へ出かける。

あれ？

いつも現れる幼稚園児の浮遊霊がない。

園児バスに轢かれて死んでしまった子で、私に靈感があるのを良い事に接近して来た。

享年五歳のくせに、やたらエロくて何度もお尻やおっぱいを触られた。

えっ？ お前におっぱいなんかない？

ホント、怒るよ、いい加減にしないと。

「あ」

私はそのエロ園児の霊が何故私によって来なかったのかわかった。

数メートル先に奴はいた。

そこには、20代くらいの美人がいたのだ。

しかも、その美人は、私と同じく靈感があるらしい。

園児のエロエロ攻撃を受けて困っているようだ。

具体的にどんな事をしているのかは、読者の皆さんのエロ度に応じて想像して欲しい。

「大丈夫、お姉さん？」

私は駆け寄って声をかけた。するとお姉さんは私を見て、

「ええ、大丈夫よ、箕輪まどかさん」

「へっ？」

私はビックリした。

そのお姉さんとはどう考えても初対面なのに、フルネームで呼ばれたからだ。

「ど、どうして私の名前を？」

「貴女の守護霊様が教えて下さったわ」

「守護霊？」

私にはまだ自分の守護霊と話す力はない。ビックリだ。

お姉さんは近くで見ると、また一段と美しかった。エロ園児が私に寄って来なかったのも納得してしまった。

私にはあの色気はない。完全敗北だ。

「さ、もういいでしょ、ケンジ君。お帰りなさい」

お姉さんは諭すようにエロ園児の霊に言った。

「はい」

園児の霊は素直に応じて消えた。

私が怒鳴っても言う事聞かないのに。

これだから男は嫌だ。

「自己紹介してなかったわね。私は西園寺蘭子。霊能者よ」

神々しいと言う言葉はこのお姉さんのためにあるのだと確信した。

女の私も惚れ惚れしてしまう。

もしかして、これってお姉さんの能力なのかな？

「貴女を待っていたの」

「えっ？ 私を？ どうしてですか？」

私は思わぬ展開に、ドキドキした。

「力を貸して欲しいの」

「えっ？ ほしのあき？」

私のボケは軽く流されてしまい、蘭子お姉さんは何もリアクシヨ  
ンしてくれない。

「学校が終わったら、校門のところで落ち合いましょう。一緒に行  
ってもらいたいところがあるの」

「は、はい」

何があるのかわからないが、とにかく面白そうだ。

しかも蘭子お姉さんは、相当な力の持ち主だ。

それがわかる。

そしてそういう事が出来てしまう私も相当な力の持ち主……と言いたいところだが、蘭子お姉さんには全然敵わない。

私は授業も上の空、先生のお説教もどこ吹く風で一日を過ごし、下校時間になるとダッシュで校門に向かった。

「あれ？」

するとすでにエロ男子共が蘭子お姉さんを取り囲んでいた。

「お姉さん、いくつ？」

「彼氏いるの？」

「今度一緒にプール行こうよ」

男子共のバカさ加減に私は呆れ果てたが、

「蘭子さん、お待ちせ」

と声をかけると、まるでクモの子を散らすようにバカ共は走り去った。

私は学校で一番強いのだ。

「悪いわね、まどかちゃん。行きましようか」

「はい」

蘭子お姉さんは私と共に近くに乗りつけられたメーカー不明のス  
ポーツカーに乗り込んだ。

霊能者が乗るイメージがまるでないような真っ赤な車だ。

もしかして、蘭子お姉さんは山口百恵のファンなのだろうか？

などと下らない妄想を膨らませていると、車は目的地に到着した。

「ここは？」

酷く田舎な感じのするところ。

「じ、ここ……」

私は途端にたくさんの霊気を感じた。

「ここは以前小学校だったの。でも、市の財政事情と子供の数のせいで、廃校になったわ」

蘭子お姉さんは悲しそうに言った。

私にも感じられた。

その建物から、すすり泣く声が聞こえる。

私と同年代くらいで命を落とした女の子達。

何だろう？

死に方がよくわからない。

「彼女達は、この場所を清めるために人柱になったの。彼女達の家  
の宿命なのよ」

「ああ……」

私はもどかしい感じが解けて行くのを感じた。

自分の意志で命を落としたのに、自殺とは違う波動を出している  
のはそのせいなのね。

「封じている怨霊は私が除霊します。貴女は彼女達を解き放ってあ  
げて。もう役目を終えても良いはずだから」

「わかりました」

何があったのかは私には難しくてよくわからないが、女の子達が  
封じている霊が凄まじい悪意を放っている事は感じ取れた。

「貴女達はもう楽になって良いのよ。もう、ここにいらなくてもいいの」

私は女の子達の霊に語りかけた。

「ホント？」

「もちろん。もう大丈夫。私達に任せて」

「わかった。ありがとう、まどかちゃん」

霊に礼を言われると何となく恥ずかしい。ってか、何で私の名前知ってんのよ？

私が彼女達を開放している時、蘭子お姉さんは壮絶な戦いを始めていた。

「貴方達ももうここには留まらなくていいのよ。そろそろ行くべきところにお行きなさい」

蘭子お姉さんは数珠を取り出して振るった。

「オレタチハ マダマダココニイル マダタリナイ マダコロス」

怨霊達の叫び声が聞こえた。しかし蘭子お姉さんは怯まない。

「ここに留まっても何も解決しないわ。私は貴方達を除霊しに来た

のではないわ。助けに来たのよ」

「ソナナコト シンジラレルカ」

霊達は抵抗した。蘭子お姉さんは、文字通り菩薩のような顔になり、

「オンアロキヤソワカ」

と唱えた。

後で調べて知った事だが、観音菩薩の真言だ。

あらゆる者に救いの手を差し伸べる観音様の力で、怨霊達は鎮まり、悪意は消滅して行った。

「お姉さん」

私は女の子達を開放して、蘭子お姉さんに駆け寄った。

「終わったわ。あの人達も救えた」

蘭子お姉さんはホッと溜息を吐き、私を見るとニコッと微笑んだ。

私も微笑み返した。

「ずっと気になっていたの。何とかならないかと思っていたの」

帰り道、蘭子お姉さんは、どうしてあの廃校に行ったのか話してくれた。

以前、除霊を依頼され、訪れた事があるのだそう。

その時はどうする事も出来ず、帰った。

そんな時、私という天才美少女霊能者を知ったとの事。

二人で力を合わせれば、何とかなると考えたのだそう。

「でも私なんかより、ずっと力がある人、たくさんいますよ。それなのにどうして？」

謙遜の意味も含めて、私は尋ねた。すると蘭子お姉さんは、

「小学生の貴女でなければ、彼女達は開放できないわ。いくら能力が高くて、大人では無理なの」

「そうなんですか」

難しい話になりそうだったので、私はわかったフリをした。

しばらくして、蘭子お姉さんの車は私の家の前に着いた。

「また声をかけてもいい？」

「もちろん。メアドと携帯の番号交換しましょう」

私が言つと、蘭子お姉さんは、

「まア、小学生なのに、携帯持っているの?」

「当たり前だのクラッカーです」

お父さんが得意のギャグをかましたが、また受け流されてしまつた。

「またね、まどかちゃん」

「はい、蘭子お姉さん」

真つ赤なスポーツカーは爆音を轟かせて走り去つた。

その後、蘭子お姉さんをチラツと見かけたお兄ちゃんから、

「紹介しろ」

としつこく言われた。

その話はまたの機会という事で。

今日は疲れた。

もう寝よつと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1120i/>

---

二人の霊能者

2010年10月20日09時11分発行